

幕末明治の写真師列伝 第百三十五回 宮下欽 その五十三

明治11年(1878)に、宮下欽は名古屋博覧会で写真を出品して受賞している。名古屋博覧会の会場は、名古屋区門前町総見寺境内に、愛知県下の産業振興を目的とした物産陳列館として新築された。総工費12,252円のうち県費の補助は6,157円で、残額は民間からの寄付金で賄われた。明治11年(1878)9月15日に落成。同日から11月3日まで50日間、名古屋博覧会を開催し、公立医学校の教頭だったローレツが人骨などを出品した。

「幕末明治の写真師列伝 第32回 鈴木真一 その3」でも述べているが、明治12年(1878)、岡本圭三は兼ねてからの約束だったアメリカ留学のため、名古屋の写真館を宮下欽に譲ることにした。ここで問題なのは、岡本圭三の写真館とそれまでの宮下欽の写真館との関係である。この二つの写真館は共に名古屋市本町にそれぞれ別にあつたのか、それとも元々、同じ写真館であつたのか判らない。つまり写真館の写真館主(オーナー)が岡本圭三で、その写真館を写真技師として宮下欽が勤めていた可能性もある。それが、明治12年(1878)になって、写真館主(オーナー)が岡本圭三から宮下欽に変わったという考えである。鈴木真一と岡本圭三と宮下欽はハリストス正教会の信者で、しかも二人とも鈴木真一と関係があつたことは判っている。写真館については今後も調べてみる必要があるが、ここではあくまで推測とする。

このあたりで先に宮下欽とハリストス正教会との関係を記しておくたい。宮下欽と名古屋ハリストス正教会との関係は古い。グレゴリイ伊東慶郎著・司祭ゲオルギイ松島雄一監修『神現聖堂成聖記念 名古屋教会史』(名古屋ハリストス正教会、2010年)によれば、明治9年

(1876)、ロシア正教の伝道者パウエル津田徳之進が名古屋に赴任し、宮下欽は名古屋市内の講義所において洗礼を受け、「イリヤ宮下」と名乗っている。(註：名古屋にロシア正教がはじめて伝道されたのは明治7年。最初に洗礼を受けたのは近藤頼兵衛で、明治10年(1877)には市内に6カ所に講義所が開かれていた。宮下欽は明治9年(1876)頃に信者になっているようだ)『宣教師ニコライの全日記』(全9巻)の中で、宮下欽に關係する記述がある部分を探すと、以下になる。

一八八二年(註：明治15年)六月六日(一八日)、日曜。名古屋。「(前略)ルカ鈴木とその妻ヴェラは東京に移転。ルカはそこで写真屋をやっている。(中略)一八七三年にここで正教を最初に伝教したのは、ダニイル影田とグリゴリイ宮本。しかし、かれらの伝教の果実は、今ではたった一人になってしまった。パウエル近藤、六五歳で、一八七七年にパウエル沢辺から岡崎で洗礼を受けた。その後、一八七七年にヴラヂミル村上(岡崎の出)が当地にやってきて、名古屋にも伝教者を派遣してくれるように頼んできた。その結果、当時岡崎にいたパウエル津田が名古屋でも伝教に勤めるよう、委嘱されたのである。かれの伝教の果実はルカ鈴木とその妻で、一八七八年、大阪に行く途中であつたエフイミイ師によって洗礼を授けられたのである。一八七八年の公会でパウエル津田が名古屋の伝教者に任命された。しかし、かれのもとには聴教者が現われなかつたので、かれは東京に戻るように命じられた。しかるにヴラヂミル村上とルカ鈴木が、かれをもう少しこの地へとどめてくれるようにと懇願してきた。それ以来、津田はしだいに伝教もうまく行くようになった。(中略)執事は四人。イリヤ宮下とペトル高木とイオシフ二村とペトル柴山。年に一度、東京の公会の前に選出される。どうやら、いま、選挙が行われたばかりであるらしい。従来どおりの者たちが選ばれたが、かれらにさらに四人の補助者が加えられた。会計係を勤めているのはイリヤ宮下とイオシフ二村。(後略)」

(註：この記述のルカ鈴木とは、岡本圭三(後の二代目・鈴木真一)のことで、その妻も最初はハリストス正教会の信者であつたことがこれで判る。しかし、後にプロテスタントへ改宗した。また、イリヤ宮下が宮下欽のことである)

一八八二年六月七日(一九日)、月曜。名古屋。

「いつもように、もう一日滞在を延ばし、異教徒への伝教をしていってくれと懇望される。そのためには夜の時間がよいのだ。午前中パウエル岡島と訪問したのは、時期的に言って当地で最初の信徒、パウエル近藤老人(士族。いまは老妻とともに養鶏業を営んでいる。執事)、ペトル柴山(写真屋)、イオシフ田村(お茶商人)、イリヤ宮下(大通りの写真屋、なかなかの腕前、内証もかなり裕福)。岡村の言によれば、かれとペトル柴山が教会のことをもっとも熱心に考えている。(中略)それに続いて先の尾張侯の城を見学する。ここの天守台は有名で、ここからは町とその近郊が遠くまで、手のひらに乗せたようによく見える。城にはここに配備された軍隊が駐屯している。城と天守台と邸宅を見るには軍司令官の許可がなくてはならないのだが、かれはいとも簡単にすべての外国人に見学の許可を与えている。そんなわけで、イリヤ宮下がわたしのために許可を取っておいてくれたのである。(後略)」

(註：ペトル柴山(写真屋)とは、柴山準行のこと。ペトル柴山準行(1857~1939)は、尾張藩士・柴山準琴の次男として生まれ、明治14年(1881)、ハリストス正教の洗礼を受ける。明治22年(1889)、司祭に叙聖。明治23年(1890)、伝教師として名古屋に赴任。大正12年(1923)、関東大震災で壊れた東京復活大聖堂(ニコライ堂)の復興委員長に指名され、名古屋を離れて上京。茶道、不言庵の家元でもあつた。)

一八九二年(註：明治25年)六月二三日(七月五日)、火曜。名古屋。

「(前略)名古屋の受洗者は二三八人。このうちの二三人と、ほかの教会で受洗した者一六人、合わせて一三九人が、現在教会に通っている信徒たちである。そのほか、四六人がほかのいろいろな地方におり、二人が行方不明、二人は信仰が冷め、三四人が永眠し、四人がプロテスタントに行ってしまった(このうち三人は、この写真屋ルカ鈴木とその妻と息子だ)。執事は写真屋イリヤ宮下とイリオン伊東、そしてイオシフ・フタムラ[二村]の三人、議友は七人。(後略)」

一八九五年(註：明治28年)一二月二六日(一八九六年一月七日)、火曜。

「(前略)名古屋の写真家イリヤ宮下が、妻のエヴドキヤといっしょに来た。きょう、かれらは松代へ行く途中にここに立ち寄った。松代にいるイリヤの兄がひどい病氣にかかつた。いまかれが死んでしまうのか、そうでないのかまだわからないが、イリヤとエヴドキヤは、葬儀のために兄の棺にかける覆い布を貸していただきたいと頼んだ。松代には覆い布がないのだと言う。これはここ数日間で二度目だ。イアコフ福原の親戚が、東京で福原の墓の準備をするために来たのに、福原は死なないで回復に向かっている。イアコフは、あの世に自分を導くための準備をした親切な者を、がっくりさせたにちがいない。今度はイリヤが似たような配慮を自分の兄にしているのだ。」

(森重和雄)